



本音と
建て前

川崎ゆきお

建て前と本音がある。建て前の中には名分がある。これは正当な理由のようなものだろうか。建て前は公人、本音は私人と解釈することもできる。私人の思いと名分が同じなら話は楽だ。この場合、思いと言うより利害だろうか。

建て前通りやると、名分は立つが、誰もそんな名分など信じているものはなく、無視していることもある。決まり事があっても、それを守ると、危ないことになるので、正直に守っている人はいなかったりする。社会通念の、この念の中に、それが入っている。

建て前と本音は違うが、本音を我慢し、建て前通りやっていると、そういう人だと思われる。だが、本人は我慢し、耐えているのだから、結構苦痛だ。本当はそんなことなどしたくないのだけれど、黙っていれば分からない。

あまり感情が伴わず、利害関係も感じないような建て前なら、すんなりこなしていこう。建て前、決まり通りの行為は気持ちがいいことがある。儀式のようなものだ。しかし、こういう場合の建て前は、あまり本質的なことではなく、大した意味はないのだろう。

建て前を無視し、本音だけでやっている人も、その本音の本音がまだあるのかもしれない。何が本音なのかが分からなくなるほど、タマネギの皮むき状態になる。そして、面倒になり、建て前に戻ったりする。

「建て前と本音ですか」

「そうです」

「使い古された話ですよ」

「そうなんですか」

「建て前に従った方が有利なときは建て前で、本音を吐き出した方が有利になる場合は本音で…
…これですなあ」

「さすが、世慣れたベテラン」

「いやいや、どっちもどっちですからなあ」

「建て前ばかり言う人が職場にいるのですが」

「それは、あなたが嫌われているためですよ」

「そうなんですか」

「あなたが言うことを聞かないから、建て前で押さえつけようとしているのです」

「そんな、見た来たように」

「違いますか？ その人と仲がいいですか」

「悪いです。嫌いです」

「それはねえ、あなたが本音を言ってしまうからですよ」

「本当のことを言っただけです」

「その本当のことが本音でしょ。本当の値のようなもの」

「そうなんですか」

「見た訳じゃないから、想像です」

「どうしたらいいのでしょうか」

「本音も建て前もなく、ただ単に相性が悪いのでしょうかなあ」

「はあ」

「まあ、建て前を持ち出す相手には建て前で対抗しなさい」

「えっ」

「相手の建て前より上位の建て前をかますのです」

「なるほど」

しかし、そんなにうまくいかないのが、人の情の怖いところだ。

了